

第21回
さの秀郷まつり

8月10・11日の両日、佐野駅周辺で第21回さの秀郷まつりが開催されました。

初日の10日には城東中学校で「秀郷流流鏝馬」が行われ、会場を訪れた皆さんは、馬の豪快な走りや射手の弓さばきに見入っていました。

夜には市民総踊りが行われ、駅前通りいっぱい広がった約1,500人が、この日初披露されたさのまる音頭などを踊りました。

また、会場には「さのまる」をはじめとした12のご当地キャラや、佐野ブランド大使・ダイヤモンド☆ユカイさんが訪れ、お祭りを盛り上げました。

2日目には神輿・おはやしの巡行などを開催。担ぎ手たちの勇壮な掛け声のもと、10の神輿・3基のおはやしが市内を練り歩きました。

両日にわたって盛り上がったお祭りは、「さの秀郷太鼓保存会」の皆さんの力強い太鼓の演奏のもと、終わりを迎えました。

ご参加・ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

第37回 たぬまふるさと祭り



8月4日、田沼中央公園で、たぬまふるさと祭りが開催されました。

このお祭りは「子どもたちにふるさとの楽しい思い出をプレゼントできるように」と、地元の商工会の青年部

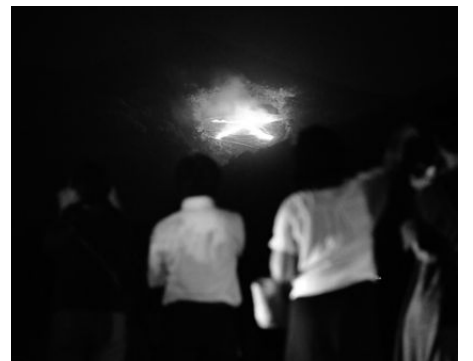
主体で企画・運営され、今年で37回目を迎えました。

ステージでは、太鼓や大道芸など楽しい催し物が行われ、「どまんなか総おどり」では、踊りの団体に加え、飛び入り参加者など数百人が参加し、やぐらを囲んで心を一つに踊りました。

フィナーレは今回が初めてとなる花火が打ち上げられ、思わぬサプライズに歓声があがりました。

第20回 みかも山大文字焼き

8月15日夜、黒袴町のみかも山西側斜面で、みかも山大文字焼きが約1時間にわたり、開催されました。



佐野工業団地会館から見た大文字焼き

「小京都・佐野にふさわしい行事を」と地元消防団が京都の五山の送り火にならって始めた催しも、今年で20年を迎えました。

午後7時に点火され、山肌に縦80m・横60mにわたるオレンジ色の「大」の文字が浮かび上がると、田んぼを隔てた佐野工業団地会館の見物会場では、訪れた皆さんが大きな歓声をあげていました。

田沼福祉コミュニティセンター 人権講演会



落語家の三遊亭好吉さんが
お話ししてくれました

小見町の田沼福祉コミュニティセンターにおいて、8月の人権対策推進市民運動強調月間に先立ち、7月30日(火)に人権講演会が開催されました。

講師に落語家の三遊亭好吉さんをお招きして、「お隣さんと仲良く、落語の近所付き合いについて」と題するお話をうかがいました。

最初は、だれでも聞いたことのあるような小噺を、プロの口調で笑いを誘ってから、「寄り合い酒」という演題の落語をお聞きしました。

実際に落語家さんから生で落語を聞くのは、初めてという方もたくさんいらっしゃって、質問のコーナーでは、手に持つ扇子や手ぬぐいなどの使い方、好吉さんの毎日の稽古の様子や暮らしぶりとか、噺家さんたちのユーモアあふれた裏話などを聞くことができ、和やかな笑いの中にも、あらためてご近所付き合いの大切さを学ぶことのできた講演会でした(市民記者 山口万里子)。

笹川むもん彫刻展



8月6日～11日、笹川むもん彫刻展が佐野市民ギャラリーで開催されました。

笹川さんは15年連続日展入選を始め、多くの展覧会で賞を受賞。佐野での個展は4度目となります。

解説する笹川むもんさん(右) 赤坂町で生まれた笹川さんは、高校3年の冬休み、日本のあちこちを旅し、富山の三代目加茂蕃山に18歳で弟子入り、井波に移り住んで40年がたちました。

井波彫刻は寺社彫刻や住宅の欄間に代表されますが、笹川さんの技能は他にも陶芸、現代造形作品と多彩です。お名前の由来を尋ねると「彫刻という枠にとらわれず、いろいろなことに挑戦したいので、『門』を無くした『むもん』と名乗っています」と話してくださいました。

今回の個展ではその多彩さを裏付けるかのように“さの市議会だより”の表紙絵が展示されました。さの市議会だよりの新年号の表紙は、24年前から笹川さんのイラストが採用されています。

昨年開催された「日時計展」同様、佐野出身でご活躍の方々がたくさんいらっしゃることに驚かされます。次はどんな方が紹介されるのか楽しみです(市民記者 永倉文子)。

まじめによく働く人をカセギモン、ハタラクモンといいますが、やや軽蔑の意を込めてカセギヤ、カセギンなどということもあります。これとは反対に、年齢的に若いのに、年輩いたお爺さん(おじい)のように働かず、毎日ぶらぶらしているような人(男)をジジオコといいます。

昭和の初め頃までは、養蚕が盛んで、多くの農家で蚕を飼っていました。蚕が成長する過程に、「眠」があり、この間は静止状態になって、桑の葉も食べず眠りの状態にはいります。眠りが終わると脱皮が始まります。こうした行為を4回繰り返したのち(4眠)、口から糸(絹糸)を吐き、繭を作り始めます。蚕は皆同じように成長するとは限らず、育ちの遅れる蚕もあります。このような蚕をオクレッコといいます。中には食べるだけ食べて大きく生長しても、繭を作らない食い逃げ蚕もいます。このように役立たずの蚕をジジオコといいます。爺とオコサマ(「蚕」に対する尊敬語)の「オコ」が結びついてできた方言です。大正生まれの人たちは、このような蚕になぞらえて家に引きこもって仕事もせず、寝転んでばかりいる中年男をジジオコといっていました。

「まだ40、50歳代の若さだというのに、食べるだけ食べて何もしネーモンだから、近所の人は、あの男をジジオコだつていつてヤンシタ(ましたよ)」

かつてよく使われたジジオコはもはや過去の語となりつつあります。

(市民記者 森下喜一)

佐野 ばんたい

仕事が嫌いな男をジジオコと
いった

